



日本福祉大学

国際福祉開発学部だより

News Letter

Faculty of International Welfare Development

October. 2015 vol.

06

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229 日本福祉大学 国際福祉開発学部 <http://facebook.com/nfuiwd/>

日本福祉大学 国際福祉開発学部ニュースレター第6号発行の運びとなりました。2015年度前期の学部行事から、夏休み中の学生各自の取り組み、卒業生の近況まで、お伝えしたいこと満載です。



World Youth Meeting 開催報告!!

国際アクティブラーニングである国際協働プロジェクトに2日間で1,000名参加
教授 影戸 誠

文部科学省後援の「ワールドユースミーティング」が8月7日、8日の2日間にわたって真新しい日本福祉大学東海キャンパスで開催されました。テーマは「Building Bridges over the Sea of Diversity」。本学と連携協力のあるカンボジア、フィリピン、マレーシア、韓国、インドをはじめ、台湾、インドネシアなど海外7カ国の大学生、高校生が参加しました。国内25校、海外25校で取り組む国際アクティブラーニングです。

| 私たちに英語の力は必要、でも…

日本では英語はEFL (English as a Foreign Language)、つまり「外国語」として学んでいます。フィリピンやマレーシアのように日常の生活の中で、英語を使いながら学ぶ第二言語習得 (Second Language) ではありません。98.2パーセントは日本人であり、日本語で苦勞なく生活しています。このような環境でどう国際的な英語を身につけるのか、その「学びの場」が必要です。ワールドユースミーティングでは、準備段階からの日常的な連携を実現し、「国際的なチームで働く」体験を実現する中で英語力を磨くことができます。



日常的なつながりを通じて世界を知ること、それがグローバル人材として自らを育てる第一歩です。英語

を使い、成果を知り、国際人として自らを育てる舞台がワールドユースミーティングです。

| 主体的に動く、連携する

学生たちは、まず5月にスカイプなどを通してお互いの自己紹介をします。英語での直接のやりとりの中で、その国の経済や、政治の状態を理解します。



カンボジアの小学校の先生の給料が、1万円程度であったり、フィリピンでは中学・高校の一環教育が4年から6年になり、世界標準に舵をきったことなど、「英語を使いながら」コミュニケーションをしています。聞くだけの英語ではなく、インタラクション(交流)の中で英語の使い方を知っていきます。

目次

- 1～3 World Youth Meeting 開催報告!!
- 4 国際会議 ICoME2015 in 中国報告!
英語学習セミナー報告
- 5～6 国際交流&海外体験!
海外インターンシップでフィリピンの養護施設へ
8か月間のマレーシア留学を終えて
シンガポール小学生の通訳補助

- 7～8 キャリア探索!
国際福祉開発学部の学生の進路ってどんなだろう?
英語教員を目指しています!!
社会人1年目 企業人として頑張っています!
国際協力の現場から!

国際的なチームで

ワールドユースミーティングは1999年にはじまり、今年で17年目を迎えました。「国際的な舞台でチームとして働く」という学部目標のもとで、参加国学生と共にプレゼンテーションを作り上げ、多くの聴衆の前で発表を行います。アイコンタクト、ジェスチャー、英語キーワードの発音など海外学生と練習を行い発表します。

衝突を乗り越える 違いを飲み込む

国が違うということは文化が違うことであり、チームで働こうとする時、必ず衝突が起きます。国際社会では当然のことです。



韓国、日本、フィリピン、インドネシアチーム

その落差の中で、学生たちは活動します。相手に迎合することなく、忍耐強く解決を見出しながらプレゼンテーションを作り上げていきます。英語を学ぶということは、単なる語学習得でなく、国際調整力を磨くことでもあります。

2日間で30近くの発表があり、工夫されたプレゼンテーションはwebで振り返ることができます。

学生は変わる！

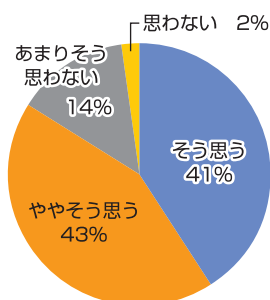
ワールドユースミーティングを通して「グローバル・コンピテンシー」（国際実践力）を身につけます。海外対応係、プレゼンテーション係等、さまざまな係活動を通してイベントを支え、体験学習の中で自分育てを試みます。

継続する国際連携力

国際交流ファシリテーション演習という科目でこのイベントに取り組んでいます。事後アンケートでは、イベント後もメールや、Facebookなどを通して交流を続けている学生が多くいます。

自分に自信を持つ

自分に自信が持てるようになった



イベントを実際に運営した106名の実行委員の8割の学生が、「自分に自信が持てるようになった」とアンケートに答えています。

主体的に海外学生と共に取り組み、その実感を持って自分への信頼を高めています。

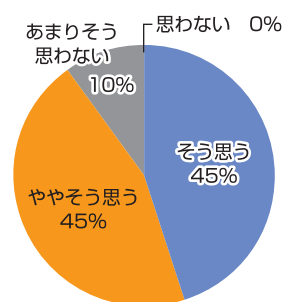
ICT活用と国際連携

Facebook、資料のやり取り、時には論議を進めるために、カンボジアやマレーシアとビデオ会議を行いました。各国でアンケートを取り、データを比較し、自分たちの主張をまとめていきました。英語やICTが、人と人をつなぎ、新しい考えを引き出すには欠かせないツールであることをつかめました。

英語プレゼンテーション力の獲得

社会でも大変重要視されているプレゼンテーション力。それを英語で行うことで、世界で活躍するための基本的な能力を身につけました。

プレゼンテーションの方法は理解できた



学生・高校生の声

プレゼンテーションをともに作る、あるいはホームステイ送り迎えをお手伝いするなど、色々なところで参加者同士の関わりが見られます。時に葛藤しながらの交流は、いつまでも心に残るでしょう。

2年統括係り 石村 未来（明石城西高校出身）

「Towards 2016」 Thanks to everyone's hard work, I think the WYM 2015 was an amazing success. There was much good feedback from the participants. However, as we still have many points for further improvement, I plan to join this event again as a junior student. I want to continue contributing to the success of the WYM while supporting as an advisor, making the best use of my experiences this year.

2年統括係り 橋本 健太（清林館高校出身）

「As a leader」 As there was much support from the seniors, I didn't think it so hard to organize the WYM. We had no idea at first how to design it on the new campus but the 3rd year students illustrated the way. As I become a junior next year, I would also like to help by teaching the students in the 1st and 2nd years the importance of predicting and hypothesizing in the process of organizing such new events.

カンボジア 王立ブノンペン大学 Muy Hung

「Making a true friend」 While walking out of the arrival gate at the airport, I found a girl wearing a yellow shirt holding a poster which had my name



on it. She was so considerate because she even wrote "welcome" in Khmer on that poster. During the

first few days of school, she was the one who took me to school and back home. In order to assist me, she also spent a few nights with me at my homestay. She always tried to fulfill my requests and help me accomplish my dreams. She even tried her best to search on the internet on how to wear a yukata. I did not really know why, but she also took a lot of photos of me, as if she was my fan. Then, at the airport on the last day, she gave me a big surprise. It was a photo album consisting of my photos with some other friends and their letters to me. I seriously did not expect that.

Now I knew why she was taking the photos. What she has done for me is priceless. I am grateful for every little thing. I will miss her a lot.

韓国 チョンナム大学 Jeon Byeol

「Collaborative work with the students from Japan」



During the preparations of our presentation, I shared my ideas and experiences from my own university and home country with my other

team members. It was really a precious time that I could get to know some other countries history, food, culture, etc. Communication begins with the open-mind. This statement absolutely shows my finding in 2015 WYM. Using English as a tool for communication is actually quite difficult for people who use English as a second language, not their mother-tongue. But I think we all overcame the barriers of communication from different cultures and different languages.

As a result, we did our best job on both preparation and presentation. WYM brought me a golden chance to make a reliable relationship among Japanese and overseas students in the name of learning and sharing within culture and experiences.

日本福祉大学附属高校の生徒さんの感想（一部抜粋）

田中 瑛

特に苦労したのは、8分以内に収めることでした。あまり直訳や難しい表現を入れずに書き終え、自分の英訳のスキルに自信ができました。

杉浦 良

今後の日本は労働環境でも外国人移住者が増大し、外国人との助け合い、心のつながりが何よりも必要となると思料します。WYMを通じて気づいた、ネクサス（心の繋がり）をモットーとした生き方を自らの人生の羅針盤にします。

柳原 麻乃

今回発表したことで、人前に立って話すということに少し慣れることができました。この経験を生かして、これからもっとプレゼンを上手くできるようになれたらいいなと思いました。

岡山 杏果

私にとって WYM のテーマ、「多様性に橋を架ける」は、自分と“何か”に橋を架けるのではなく、自分と“自分”に橋を架けることができるということでした。

川瀬 由希菜

ひとつのタイトルを色々な視点で意見を出し合うことがいいと思いました。自分が考えている意見と違う意見を聞くことが出来、相手がどのように考えているのかが分かることができました。

伊藤 美由紀

音楽セッションの際にボーカルの方が、日本語の歌詞を英語に翻訳し、パワーポイントで流していました。その個人の“努力”こそが、世界と世界を繋ぐ“架け橋”になるのだと思いました。

古林 燎

うまくコミュニケーションを取れなくてトラブルがおこり気持ちがバラバラになった時期もありました。だけど、本番、皆気持ちが一つになっていた。終わったあとの達成感がすごく気持ちよかったです。

森田 朋美

台湾の高校生とのプレゼンをすることになり、英語で交流をしました。話すうちに打ち解けられて、台湾の良さも教えてもらい、いつか行きたいと思いました。

瀧村 理紗

台湾の高校生が私の家にホームステイにきました。私より年下なのにハキハキしていて自分の意見をしっかり持っている子でした。記憶力もとても良くて4日間しか一緒にいないのに最終日には沢山の日本語をはなせるようになっていました。

中村 友梨亜

今、日本人と海外の繋がりはとても広く大きなものだと思います。私もこれから生活していく上で海外との繋がりを大切にしたいです。

服部 佑香

他の高校生、大学生は自信満々に話していて圧倒されました。唐突な質問にも戸惑わず理由や例を付け加えて英語で答えていました。私には到底できないことを、当たり前のようにやっていることに感動しました。

国際会議 ICoME2015 in 中国報告！ 国際教育メディア学会 ICoME2015（中国・長春）の参加報告

教授 佐藤 慎一

8月17日から20日まで、中国・長春の東北師範大学で国際教育メディア学会（ICoME2015）が開催され、本学部の3、4年生8名が教員と共に参加しました。学生達はここ数年、韓国の全南大学と協働で調査研究を進めており、その成果を取りまとめ、4グループに分かれて発表しました。以下、学生の声を紹介します。

| 異国間協働作業で学んだリーダーシップ

4年 内藤 大貴（惟信高校出身）

私のグループは、日福大3人、全南大2人の合計5人構成で、自分の企画した調査・研究を、韓国の学生達を含めていかに分担して全体をまとめるかに苦労しました。協働作業に必要なリーダーシップを英語の壁に直面しながら実感する経験となりました。研究の全体構成をメンバーに分かりやすく伝え、自分1人で作業を抱えずに分担することで、全員が真剣に取り組むことができました。全体を見据えてコーディネートする力は社会から求められる能力だと思うので、この経験を忘れないようにしっかりと振り返っていくことも大事だと思います。WYMや就職活動と同時進行だったため、日程的にはハードでしたが、苦しかった分だけ得られたものも大きかったと感じています。



発表時の様子

| 韓国学生との関係を大切に今後につなげる

3年 中野 敬太（横浜清風高校出身）

初めて国際会議に参加し、世界の広さを実感しました。

研究者や他大学の学生のプレゼンを頑張っているのを聞いて、十分に聴きとれないながらも素晴らしい発表であることは理解でき、圧倒されました。私達も同じ場で発表できたことを嬉しく思うと同時に、仲間と共に最後までやり遂げられたことを誇りに思います。サポートして頂いた先生方や先輩には本当に感謝しています。そして何よりも、協働で苦労しながらプレゼンテーションを作り上げ、共に発表した韓国の学生達と、一番長く作業を共にした本学のメンバーには心から感謝しています。韓国の学生との関係を大切にしながら次に繋げていくためにも、日々の努力に励もうという思いを強く抱いています。



発表終了翌日、リラックスして韓国の学生たちと交流を深める

英語学習セミナー報告 高校生英語学習セミナー & 高大連携英語教育セミナー報告

准教授 中西 哲彦

7月19日（日）に高校生対象の英語学習セミナーが行われ、国際福祉開発学部の学生による「世界とつながる楽しさ」というテーマでのプレゼンテーション、Gary先生による「できるかな？『英語でプレゼン』」が実施されました。「世界とつながる楽しさ」では、高校での学習の大切さや、大学で学ぶための心構えがよくわかった、という声をたくさん頂きました。「英語でプレゼン」では、緊張しながらも参加者が楽しそうに最後のプレゼンをしてくれました。世界とつながるためには、高校での勉強が大切だと改めて気づいた、という多くの感想を頂きました。

8月16日（日）には高大連携英語教育セミナーが行われました。国際福祉開発学部の教員によるセミナーや、カンボジアから東京工業大学に留学中のUk Sovannaraさんの講義、国際福祉開発学部の学生によるプレゼンテーションが一日にわたり行われました。参加された小・中・高等学校の先生方からは、「Sovannaraさんが話してくれた英語の重要性は大変参考になった」「ICTを使って、プレゼン、論文の両方

方に関連付けて学べることは、耳新しく、有効な事だと気づいた」「国際協力の現場の



話は大変参考になった。語学学習は世界への窓口という言葉、授業でも使いたい」などの声が寄せられました。学生たちは、現役教員を前にして緊張気味でしたが、「高校までの学びと大学での学び」をテーマに、自分自身の成長を確かめるように、高校時代から大学入学後までの生活・学習両面の変化を語ってくれました。「学生さんのプレゼンテーションが多くあり、学部の特徴や学びの様子がよくわかってよかった」「プレゼンテーションの指導そのものに、ヒントをたくさんもらった」など、好評を頂きました。

国際交流 & 海外体験！

海外インターンシップでフィリピンの養護施設へ（国際協働インターンシップⅡ）

3年 中林 和（甲府西高校出身）

私はフィリピンにある日本人経営の養護施設でインターンシップをしてきました。現地のスタッフと一緒に食事の準備をしたり、隣町に買い出しに行ったり、子どもたちと一緒に掃除をしたり、入浴の補助をしました。最初は現地語しか話すことが出来ない子どもたちとの言葉の壁を感じました。しかし、このインターンシップを通して、笑顔で愛情を持って接することで心を通わせることができると分かりました。また、子どもたちや現地スタッフの方たちと過ごしていると、



食事準備を手伝う

近隣住民や学校関係の人などの手助けもあり養護施設が成り立っているのだなと思いました。私は将来、養護施設のような、子どもたちが自立するまで手助けす



誕生日を祝ってもらいました！

る仕事に就きたいと考えています。今回の経験から、人は一人では生きていけないことを改めて実感しました。出会った子どもたち、これから出会う子どもたち一人一人に愛情を持って支援することを大切にしていきたいです。

8 か月間のマレーシア留学を終えて

私は1年生の時にWYMで出会ったマレーシア科学大学の参加者をきっかけにマレーシアとの関係が始まり、1年次の国際フィールドワークでも現地に行き、多くの友人やホストファミリーと出会いました。この国で異文化・多文化の中に身を置いていろいろなことを感じてみたいと思い、そんな思いから昨年度の留学を決意しました。

そんな私が一番苦労したのは、クラスメイトと毎日行ったディスカッションです。元々英語が苦手だった私の話は拙すぎて最後まで聞いてもらえることがあり



留学先の大学の友人達と（後列中央が日野さん）

4年 日野 恵実（岡崎東高校出身）

ませんでした。しかし、日々の授業や課題提出をとにかく真面目にこなしていくことで、段々と対等に意見を交わせるようになりました。この留学で一番やり遂げたことは、この日々のディスカッションだと思います。英語で話せるようになったということだけでなく、宗教も価値観も生まれ育った背景も違う彼らと毎日意見を交わし続けたことで、以前とは違った角度から物事を見ることができるようになったことです。

生活の面では、ルームメイトを始めとする多くの友人や、3家族のマレー人ホストファミリーに支えていただき、苦労したと思うことは殆どありません。

ホストファミリーとの生活は、「マレーシア人」「イスラム教」という異文化への理解の大きな架け橋ともなりました。

留学がきっかけで、世界の出来事や人々を今まで以上に身近に感じ、考えるようになりました。マレーシアで過ごした8ヵ月は、私を一人の日本人から地球人へと成長させてくれたように思います。この経験を活かし、地球人として Think globally, act locally を実践できる社会人となっていきたいです。

シンガポール小学生の通訳補助

6月1日（月）、愛知県美浜町の「草の根国際交流事業」の一環として、町内三つの小学校（河和南部、河和、布土）がシンガポールのイーミン小学校（教員3名、児童15名）を受入れる際、国際福祉開発学部生ら14名が交流の通訳補助を行いました。参加した1年生3名の感想を紹介します。



1年 岸 玲司（高田高校出身）

今回のボランティアは参加しなければ分からなかった事ばかりで、本当にいい経験でした。人種が混ざりあう国ならではの祝日があること、人種によって得意な分野の違いがある事にも驚きました。

また、自分の英語力の無さを痛感しました。ヒアリングができないために一方的な「支援」になり、イーミン小学校の生徒には余計に負担をかけたかもしれません。また、日本語で行われた授業体験で、英語での説明をもっと工夫すればよかったと反省しました。聞くことも話すことも今以上に力をつけて、交流の場で子どもがガリラックスして楽しめる空間を作れるようになりたいと思いました。



1年 平安 名末聖（日本福祉大学付属高校出身）

日本人とシンガポールの子供達のやり取りでは、お互いがお互いの言葉を使っているのに交流ができて、とても楽しそうでした。子供達をみて、言葉が通じな

い場合はジェスチャーと笑顔は交流に大切だと感じました。

しかし、英語が話せないと相手に対して詳しく説明できず、通訳の手伝いだった私自身はとても苦勞し、ジェスチャーや笑顔だけではコミュニケーションの限界を感じました。これからもっと英語や他言語を勉強して、コミュニケーションスキルを向上させていきたいと思いました。



1年 町野 紗希衣（中津高校出身）

初めて実際の教育現場でボランティアをさせて頂き、かつ国際交流ができて、とても有意義な時間でした。イーミン小学校の生徒達は活発で、私のつたない英語でも聞き取ってくれて嬉しかったです。実際に英語を使って会話をすることは難しく、伝えたいことが英語で言えない時は、もどかしさを感じました。この反省をこれからの勉強に活かしていきたいです。もう一つここで学んだことは「当たり前」についてです。大学の講義で、「偏見を捨てて」という話し合いはしてきましたが、自分の中の「当たり前」から脱却することは時間がかかるように感じました。シンガポールには運動会がないと聞いて日本での運動会の存在意義を考えさせられる機会にもなりました。

将来、英語教師になりたいので、今回の経験はとても有意義でした。チャンスを与えてくれた学部の教職員、役場の方に感謝したいです。ありがとうございました。

キャリア探索！ 国際福祉開発学部の学生の進路ってどんなだろう？

英語教員を目指しています!!

教職インターンシップを終えて（国際協働インターンシップⅠ）

4年 阿部 智弘（磐田東高校出身）

私が研修したインターンシップでは、教育実習前に先駆けて一定期間地域の学校に訪問し、授業以外の教員の仕事を体験的に学ぶことが主な目的でした。しかし、授業のサポート役として授業に参加し、先生方の授業の進め方、生徒の反応など大学の授業の中では想像しかできなかった部分を実際に自分の目で見て体験することができました。

また、部活動にも参加し、野球を通じて生徒との関わり方、信頼関係を築くことの大切さを学びました。これらの学びから、教師は人とのかかわる重要な仕事であり、難しい仕事だということを改めて実感すると同時に、ぜひ教師になりたいと強く思いました。将来、生徒からも他の教師からも信頼される教員になりたい

と考えています。



国際協働インターンシップⅠの教職インターンシップとは…

教員を目指す学生向けのキャリアデザイン教育です。受入校の理解と協力によって、学校で就業体験の機会を得て、4年次の教育実習の短い期間だけでは体験できない教員としての職務について理解を深め、視野を広げ、人間的成長を図り、自律した教員に求められるスキルを知ることが目的としています。

<学習目標>

学校現場を広く体験し、教員の職務内容を適切に理解できる。児童・生徒を見る目、人間に対する理解力を伸ばす。実践的な力を磨く。年少者とふれあうことで人間的成長を促進する。

社会人1年目 企業人として頑張っています！

日本にいながら世界と繋がる仕事

2015年卒業 古村 沙紀（名古屋女子大学高校出身）

本学部での在学中には、自分自身が海外へ行ったり、海外から日本へ来る学生と交流したり、多くの場面で世界との繋がりを体感した4年間でした。

現在、私は証券会社で営業職として働いています。毎朝、出勤するとまずアメリカ・ニューヨークの市場の数値を確認します。証券会社で扱っている商品は、世界中の証券取引所の様々な動きによって形成されています。そのため、たとえ日本時間では深夜の時間帯だとしても、ニューヨークでは昼間の時間であることから、朝一番で「私たちが寝ている間に起きていたこと」を追う事が私の1日の始まりです。

このように、私の仕事は日本に居ながら世界の動きを常に捉えています。職場で外国語を話す機会や、日本人以外との交流は日常的にはありませんが、日々

「国際」「世界との繋がり」を意識して仕事を行っています。



自らのキャリア形成についてプレゼンする古村さん

国際協力の現場から！

青年海外協力隊員として

卒業して3年。大学在学中から青年海外協力隊員はまさに「あこがれ」だった。自分には難しいだろうと感じていた国際協力の世界。しかし全ては挑戦から始まるのだと、大学4年間を通して学んだ。

様々な事情が重なり、青年海外協力隊への挑戦。偶然にも派遣先は、恩師である小國和子先生が20年前に同じく協力隊活動を行った、インドネシア南スラウェシ州だった。

様々な生産組合の支援を通して社会の課題に迫る生活は、毎日が新鮮だ。しかし異文化の中で活動して思うことは、現地に残るものを共に作り上げていく難しさである。そのためには今、何かを成し遂げることが必ずしも正しいとは言えないかもしれない。しかし一喜一憂しつつ前に進む日々は楽しい。

そして今回、小國先生と二人の後輩が訪問する機会を頂き、共に先生のかつての協力隊活動現場を訪れた。学生時代に聞いてはいたが、実際に当時の活動の様子を、当事者である恩師から直接聞く機会は、新鮮で迫力のあるものだった。

2012年卒業 丹羽 俊策（丹羽高校出身）

また20年という時の流れを経て、当時の協力活動が現地の今の生活に生きている事が、同じ協力隊員として感慨深く思えた。特に前述のような難しさを感じている自分には、特別な印象となった。

今回の訪問を前に小國先生からは、先輩として「背中で語って欲しい」と言われていた。まだまだ未熟な自分は、後輩に対して今の活動を説明するだけで精一杯だった。それでも今回感じたように、月日が流れても自分が関わった現場を忘れず大切にしていける、そんな謙虚な姿勢であり続けたい。



協同組合事務所で丹羽先輩、同僚の皆さんと

インドネシアで活躍する先輩の現場を訪問しました！

3年 金田 裕介（常滑高校出身）

私は、8月の下旬にインドネシアで青年海外協力隊員として活動する丹羽先輩の職場を訪問しました。現地のスーパーマーケットで、地元産ショウガを使った日本の「がり」を広める活動を見学しましたが、中華系やマレー系など多様な人が買い物に来ており、多文化共生を肌で感じる事ができました。

また、丹羽さんが働く事務所を訪問した際には、職場の方々から丹羽さんへの愛を感じました。「協力隊は支援するというよりも、一緒に現地の人と仕事をすること」と話された丹羽さんの気持ちは現地の人達にしっかりと伝わっていると思いました。

私も先輩に続いて世



プロモーション活動中のスーパーマーケットを訪問

界で活躍できるように、残りの大学生活もしっかりと勉強に取り組みたいです。

3年 清水 啓太（御津高校出身）

丹羽先輩を訪問したことはとても良い経験になりました。実際の現場に行くことで、新たな発見と、自分に足りないものが見えました。特に感じたことは現地の人とのコミュニケーションの重要性です。訪問先では多くの人の話を聞くことで、外からは見えなかった地域の歴史や問題がわかり、より深くその地域を知ることができることに気づきました。また、インドネシア語で話す先輩を見て改めて現地語コミュニケーションの重要性に気づきました。この経験を今後の学習に生かしていきたいと思います。

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229
TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281
<http://facebook.com/nfuiwd/>

編集人：国際福祉開発学部 学部長 小倉 美津夫、准教授 小國 和子
お問い合わせ：kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp